



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	台湾に渡った北大農学部卒業生たち
Author(s)	山本, 美穂子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 6, 15-41
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45213
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARHUA6_002.pdf



< 論 文 >

台湾に渡った北大農学部卒業生たち

山本 美穂子

はじめに

北大農学部（札幌農学校 [1876-1907]・東北帝国大学農科大学 [1907-1918]・北海道帝国大学農科大学 [1918-1919]・北海道帝国大学農学部 [1919-1947]）は、日本が台湾を領有した1895年から終戦までの50年間、卒業生を台湾に送り続けた。北大農学部卒業生の多くが植民地台湾へと就職し、台湾に対する日本の植民地経営の担い手となった。1931年満州事変を契機に中国東北地方への侵攻が進むと、北海道帝国大学では1933年に農学部農業経済学科の教官が中心となって「北海道帝国大学満蒙研究会」を組織し、中国東北地方に関する植民施策の研究・教育に重点的に取り組むようになった。そのようななか、北大農学部卒業生の就職先も徐々に中国東北地方へシフトしていったが、1934年まで北大農学部卒業生（学士）の外地就職先は台湾が最多を占めた。

北海道大学沿革史の記述（『北大百年史 通説』1982年、152～153頁）は、札幌農学校と台湾との結びつきの基点を、新渡戸稲造（札幌農学校2期生）が台湾総督府技師に就いた1901年に求め、植民地に就職した卒業生の統計概要を載せながら、「卒業生の植民地や中国・朝鮮への進出傾向はその後東北帝国大学—北海道帝国大学卒業生に受け継がれることになる」と指摘している。

近年になって、呉文星が、近代台湾農業・糖業の学問形成に及ぼした北大農学部卒業生の影響を考察する視点から、(1)「札幌農学校と台湾近代農学の展開—台湾総督府農事試験場を中心として」（中京大学社会科学研究所編『日本統治下台湾の支配と展開』社研叢書15、2004年、479～522頁）、(2)「札幌農学校卒業生と台湾近代糖業研究の展開—台湾総督府糖業試験場を中心として（1903～1921）」（松田利彦編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』国際日本文化研究センター、2008年、89～105頁）を発表した。呉文星は、1903～1921年における台湾総督府農事試験場・糖業試験場を対象として、特に、両試験場の技術職に就いた北大農学部卒業生の動静と彼らの「業績」を明らかにした。また、呉文星は、1895～1915年に渡台した北大農学部卒業生と、1906～1921年糖業試験場に勤めた北大農学部卒業生の一覧を作成した。呉文星による一連の研究は、北大農学部卒業生の両試験場における具体的な役割を明らかにしたという点で重要である。

李恒全「台北帝国大学設立計画案に関する一考察—幣原坦の設立構想を中心に—」（『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第1巻第1号、2007年、45～64頁）は、台

北帝国大学理農学部創設に、大島金太郎をはじめとする北大農学部卒業生が重大なかかわりを有していたことを明らかにした、示唆に富む論文である。

陳瑜「台北帝国大学理農学部製糖化学講座と台湾製糖産業の発展—浜口栄次郎の研究業績を中心に」(『現代台湾研究』34号、2008年、26～43頁)、同「台北帝国大学理農学部『農学・熱帯農学講座』の研究成果について」(『教育実践学論集』第9号、2008年、141～151頁)、葉碧苓『臺北帝國大學與日本南進政策之研究』(稻郷出版社、2010年)は、台北帝国大学理農学部教授として北大農学部卒業生が教育研究に携わったことを指摘した。

藤原辰史「稲も亦大和民族なり—水稻品種の『共栄圏』」(池田浩士編『大東亜共栄圏の文化建設』人文書院、2007年、189～240頁)は、台湾総督府が推奨する水稻の新品種「蓬莱米」について、磯永吉『増補版蓬莱米談話』(1965年)等の記述から、「蓬莱米」の作付が台湾農民に拒絶された事例があったことに着目し、植民地台湾で磯永吉(東北帝国大学農科大学農学科1911年卒、台湾総督府技師)が担った育種学(水稻品種改良)の「成果」が、植民地統治・経営と相克する状況を描出していて興味深い¹⁾。

大学・専門学校卒業生たちは、官僚として植民地統治・経営にどのようにかかわったのかという点については、岡本真希子『植民地官僚の政治史—朝鮮・台湾支配と帝国日本』(三元社、2008年)、松田利彦・やまだあつし編『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』(思文閣出版、2009年)が示唆に富む。

本稿では、上記先行研究を踏まえながら、(1) 植民地台湾と札幌農学校～北海道帝国大学農学部とのつながりを再考察する第一歩として、1895～42、1944年²⁾における北大農学部卒業生(学士)の渡台者数の変遷を学科別(専攻別)に追いながら、渡台した北大農学部卒業生の動静をとりまとめる。このことを通じて、札幌農学校と台湾との結びつきの基点を、新渡戸稲造が台湾総督府技師に就いた1901年に求めている『北大百年史 通説』の記述を脱することとなるはずである。(2) その次に、最近整理が進んだ農学部植物学教室関連資料、就中初代教授宮部金吾(1860-1951、札幌農学校2期生)の旧蔵書簡³⁾にもとづく事例検証として、植物学教室(札幌農学校本科[植物病理学専攻]→東北帝国大学農科大学農学科第三部[植物分科]→北海道帝国大学農学部農業生物学科[植物分科])に焦点をあて、植物学教室卒業生(宮部金吾の門下生)が渡台に至った経緯と背景を解明する。

1. 渡台した北大農学部卒業生の動静

1895～1942、1944年における北大農学部卒業生(学士)の渡台者数の変遷を表1に掲げた。同期間に渡台した北大農学部卒業生一覧(以下、「渡台者一覧」と略す)は、「参考資料」として、『北海道大学大学文書館年報』本号、130～147頁に掲載した。表1及び「渡台者一覧」から、北大農学部卒業生の台湾での就職先は、①台湾総督府の技術職、②製糖会社の技術職、③台湾総督府農林専門学校⁴⁾、台北帝国大学理農学部の教官が大きな潮流をなし、①～③を足掛かりとして、渡台する北大農学部卒業生が増加している。そこで、

①～③の動静について考察する。

表1 渡台した北大農学部卒業生数（1895～1942、1944年）

年／専攻	1～12期生	農学	農業経済学	植物病理学	農用動物学	農業生物学	農芸化学	畜産学	林学	工学科	計
1895	4						1				5
1896	6						1				7
1897	6						1			1	8
1898	5						1			2	8
1899	3						2			2	7
1900	3	1					1			2	7
1901	5	2					2			1	10
1902	5	1	1				2			1	10
1903	5	1	2	1			3			2	14
1904	6	1	2	1			3			2	15
1905	5		1	1			3			2	12
1906	6	1	2	2			3	2		2	18
1907	4	4	2	2	1		4	2		4	23
1908	3	5	3	2	1		4	2		3	23
1909	3	6	5	2	1		6	3		3	29
1910	4	6	6	2	1		7	3		3	32
1911	3	6	6	2	2		8	4		3	34
1912	2	8	8	2	2		11	4		1	38
1913	3	9	10	2	2		12	5		1	44
1914	3	10	10	2	2		12	6		1	46
1915	3	11	10	2	2		15	6	1	1	51
1916	2	17	10	1	2	1	17	6	1	1	58
1917	2	18	8	1	2	1	24	6	3		65
1918	4	18	8	1	2	1	24	7	2		67
1919	3	20	8	1	2	1	28	6	4		73
1920	3	20	9	1	2	1	32	6	5		79
1921	3	19	8	1	2	2	28	6	6		75
1922	3	17	10	1	2	2	29	6	7		77
1923	3	18	9	1	2	2	32	5	9		81
1924	3	20	11	1	2	3	33	5	11		89
1925	3	20	10	1	2	4	31	4	10		85
1926	3	23	10	1	2	4	36	4	10		93
1927	3	27	13	1	2	4	36	4	10		100
1928	2	29	14	1	2	5	38	4	10		105
1929	2	31	15	1	2	7	44	5	11		118
1930	1	31	13	1	2	9	42	8	11		118
1931	1	33	17	1	2	9	41	8	11		123
1932	1	32	16	1	2	9	43	9	11		124
1933	1	30	16	1	2	9	48	8	11		126
1934	1	31	16	1	1	9	46	10	11		126
1935		31	15	1	1	10	44	11	11		124
1936		32	16	1	1	9	43	12	12		126
1937		34	16	1	1	8	42	10	14		126
1938		34	14	1	1	8	42	10	15		125
1939		38	18	1	1	8	43	11	15		135
1940		37	19	1	1	9	44	13	16		140
1941		39	21		1	9	45	12	17		144
1942		34	17		1	9	41	12	15		129
1944		32	15		1	10	38	14	12		122

- 備考 (1) 『札幌同窓会報告』、北海道帝国大学『卒業生住所録』、同『卒業生名簿』より作成し、『旧植民地人事総覧』台湾編1～6（日本図書センター、1997年）、『台湾総督府公文類纂』（国史館台湾文献館蔵）、『学芸会雑誌』、『文武会雑誌』等により補った。その他、参考資料は「渡台者一覧」巻末147頁に記した。
- (2) 札幌農学校13期生より専攻制が適用された。なお、集計には札幌農学校本科であった工学科（1891～97年卒、工学士）も含めた。以下の表も同様。
- (3) 1907年大学昇格後の学科名は、農学（農学科、農学科第一部）、農業経済学（農業経済学科、農学科第二部）、畜産学（畜産学科第一部、同第二部）である。なお、林学は林学科を指し、札幌農学校の専攻制にはない。農業生物学は、植物病理学と農用動物学専攻を合わせた農業生物学科（農学科第三部）を指す。農学科第一部・第二部・第三部は1913～20年の専攻学科名。以下の表も同様。

1-1. 台湾総督府民政局殖産部における殖民地選定・樟脳事業

1895年台湾総督府内に、民政局殖産部が設置された。民政局殖民部は、台湾の殖産・殖民事業に着手する技術者として、北海道の殖産・殖民事業に従事した札幌農学校卒業生を配置した。札幌農学校卒業生として最初に渡台したのは、①横山壮次郎（札幌農学校8期生：地質学専門、元北海道庁技手）、②藤根吉春（8期生：畜産学専門、元北海道庁技手見習）である⁵⁾。横山は同年6月18日付で、横山を頼って渡台した藤根も12月6日付で台湾総督府民政局殖産部勤務となった⁶⁾。また、同年6月22日に札幌農学校を卒業したばかりの萱場三郎（13期生：農芸化学専攻）も、橋口文蔵（台湾総督府民政局殖産部長心得、元札幌農学校長・北海道庁理事官）に従って1895年11月渡台し、殖産部に勤務した⁷⁾。

渡台後、横山壮次郎の視線は、早速、「蕃地」もしくは「生蕃地」と呼称されていた先住民地域（居住地、狩猟・農業地域等）へと向かった。「茶に次ぎ重なる輸出品は砂糖、樟脳に候（略）樟脳は遣り方に依りては世界の市場を制するを得べく後來最も望ある事業と存候（略）他日蕃地征服の後には恰も今日の『アイヌ』と均しき状況に立至るべくと被存候」（1895年8月26日付書簡）⁸⁾、「鉦山探究上最も有望の生蕃地は今日は決して無暗に行かれず等の事にて中々思ひ通に参らず候」（同年12月27日付書簡）⁹⁾と、横山は在札の同窓生へ伝えた。台湾本島の南北中央に走る山脈部分と山麓は、先住民地域であった。その地域には、台湾の重要輸出品「樟脳」の原料である樟（クスノキ）が繁茂していた。台湾総督府による樟脳事業の拡大は、先住民地域の横奪を意味し、先住民族の抵抗は激化した。

翌年3月31日台湾総督府条例（勅令第88号）が公布され、民政局殖産部が4課（農商課・拓殖課・林務課・鉦務課）に分課すると、拓殖課長・技師には4月23日付で柳本通義（札幌農学校1期生）が招聘された¹⁰⁾。柳本は、前職（北海道庁技師）で北海道の空知区域（1887年）、天塩・十勝区域（1888年）等の原野を実地踏査して、殖民地選定・区画設計・実地測量監督を務めた、北海道庁の殖民事業経営の基礎を築いたひとりであった。早速、柳本は9月27日付で「蕃地取調方法調査委員」に任命され、台湾の殖民地選定にあたるうえで最重要事項であった、先住民地域の調査への取調策定にあたった。

一方、1896年3月31日には台湾総督府撫墾署官制（勅令第93号）も公布され、「蕃民ノ撫育、授産、取締ニ関スル事項」、「蕃地ノ開墾ニ関スル事項」、「山林、樟脳製造ニ関スル事項」に従事する撫墾署の設置が決まった。撫墾署は先住民族の抵抗を弾圧して取締り、樟・樟脳製造業を監視する役割を担った。同年6月～8月にかけて台湾総督府は撫墾署を11箇所開設し、叭哩沙撫墾署長には小野三郎（5期生）が、大湖撫墾署署長には嵯山清利（3期生）が就いた。

台湾占領直後の1895～96年に渡台した札幌農学校卒業生の6名は、台湾総督府民政局殖産部に属して先住民地域を踏査する殖民地選定の技師と、先住民族を取り締まる撫墾署の署長であったことに十分注意する必要がある。彼らは植民地台湾統治の最も先鋭的な部署を担った点を強調して過ぎることはないのである（表2）¹¹⁾。

その後、民政局殖産部拓殖課では、移民500戸の入植を想定して、1896年から殖民地選

定調査（殖民適地の位置・地勢・風土・農牧等の各種産業の適否を査定）を開始した。横山壮次郎技師、藤根吉春技手らは1897年台湾南部・北部に分かれて、先住民地域の実地踏査をした¹²⁾。例えば、藤根吉春は1897年に新竹県と宜蘭庁に入り、新竹県三叉河附近原野には牧場の設置を提案し、宜蘭庁叭哩沙原野には農業殖民が不適であることと樟の自生を報告している¹³⁾。柳本通義・横山壮次郎・藤根吉春が携わった殖民地選定調査は、1896～97年で1億9,973万4,800余坪を区画選定したが、台湾先住民の激しい抵抗の中¹⁴⁾、1900年6月限りで打ち切りとなった¹⁵⁾。

表2 渡台した札幌農学校本科卒業生一覧（1895～1897年）

年	卒業生名／略歴／発令日付
1895年	横山壮次郎／雇員大本営附／1895年5月12日付 ／台湾総督府民政局殖産部詰／1895年6月18日付
	藤根吉春／台湾総督府雇員／1895年11月17日付 ／民政局殖産部勤務／1895年12月6日付
	萱場三郎／台湾総督府雇員、民政局殖産部勤務／[1895年11月付]
	小野三郎／台湾総督府雇員、民政局殖産部勤務／[1895年11月付]
1896年	柳本通義／台湾総督府民政局技師、殖産部拓殖課長／1896年4月23日付 ／台北台中台南縣管内巡回／1896年12月26日付 ／蕃地取調方法調査委員／1896年9月27日付 ／新竹台中縣管内巡回／1896年9月28日付
	横山壮次郎／台湾総督府民政局技師、殖産部鉱務課兼拓殖課勤務／1896年4月21日付
	藤根吉春／台湾総督府民政局技手、殖産部勤務／1896年4月1日付 ／殖産係長兼撫墾係／1896年7月10日付 ／殖民治撰定のため宜蘭支庁管内出張／1896年12月21日付
	萱場三郎／台湾総督府民政局技手、殖産部勤務／1896年付
	小野三郎／撫墾署主事／1896年4月1日付 ／叭哩沙撫墾署長（台北県叭哩沙）／1896年5月25日付
	梶山清利／撫墾署主事／1896年4月1日付 ／大湖撫墾署署長（台中県大湖）／1896年5月25日付
	柳本通義／台湾総督府技師、民政局殖産課拓殖掛長／1897年11月1日付
	横山壮次郎／鉄道及永久道路探検隊に属し蕃地派遣／1897年1月27日付 ／台中県管内出張中撫墾署長事務取扱／1897年5月19日付 ／台湾総督府技師、民政局殖産課勤務／1897年11月1日付
1897年	藤根吉春／大湖南庄五指山大崙炭撫墾署出張／1897年1月29日付 ／台湾総督府技師、民政局殖産課拓殖掛兼農商掛／1897年11月1日付

備考 「台湾総督府公文類纂」No.560、2476（国史館台湾文献館蔵）、『学会雑誌』第19号（1896年6月）、同第20号（1896年11月）、新渡戸稲造編『横山壮次郎君』（1910年）、前掲『旧植民地人事総覧』台湾編1、『札幌同窓会第四十二回報告』より作成した。推定は〔 〕表記とした。なお、1895年渡台した小野兼基（1期生）は在台中の行動が不詳のため表に含めていない。

1897年10月官制改正により、民政局殖産部は殖産課に改められ、4課（農商課・拓殖課・林務課・鉱務課）が殖産課に一本化され、殖産課は殖産事業全般を掌理することとなった。1898年6月官制改正により民政部殖産課長に就いた柳本通義は、1899年には事務官も兼務し、1904年6月恒春庁長として転出するまで一貫して拓務関係の実務・指揮を総督府内で掌理し続けた。樟脳・樟脳油の専売化に向けた先住民地域の取調調査と専売策定に従事し

て、台湾総督府の幹部となった柳本は¹⁶⁾、総督府内の札幌農学校卒業生の拠り所となった¹⁷⁾。

1-2. 台湾総督府における製糖業・農業行政

1896年から、台湾総督府は、台湾既存の各種産業（製脳業・水産業・製塩業・鉱業・林業・農業・畜産業・製糖業など）の調査を技師・技手にあたらせ、台湾植民地経営に相応しい産業の選定を行なった。例えば、萱場三郎は台南管内における塩業、沿岸漁業・養魚業の調査を行なっている¹⁸⁾。1898年には製脳業・製塩業を台湾総督府はいち早く専売化した。技術改良に多大な時間と人手を要する農業・製糖業・畜産業は、政策・施設の策定が遅れた。

台湾総督府は、独立財政の確立に向けて、①1901年11月民政部殖産局農商課を新設し、②1902年6月臨時台湾糖務局を新設、③1901年から各種試験場を設置して、農業・製糖業・畜産業の重点的な技術改良とインフラ整備に本格的にのりだした。特に、東部は平野が少なく、山間部は先住民地域で開墾に困難がともなう状況下では、西部の限られた平野で、①単位面積当たりの収穫量の増進と、②品種改良による収穫作物の品質向上が、農業・製糖業就中甘蔗栽培に共通する課題であった。その課題にあたらせるため、1901年以降、台湾総督府は、農業技術改良と農政・糖政実務を担当する技師として、北大農学部卒業生を重用した。

(1) 民政部殖産局農商課・臨時台湾糖務局における農政と糖政

民政部殖産局農商課には、地方県で農政事務に従事していた札幌農学校卒業生が、1901～1902年にかけて、早速呼び戻された。農商課長に横山壮次郎（前台北県技師・農商課長：1898年6月～）、技師に藤根吉春（前台南県技師・殖産課長：1898年6月～）が就いたのである。

一方、臨時台湾糖務局は、1902年6月、糖務課長は横山壮次郎が兼任し、同課技師には小花和太郎（札幌農学校予科1889年中退、前台北県技師）、台南支局長には堀宗一（3期生）、同支局技師には東條秀介（15期生：農芸化学専攻）といった札幌農学校同窓生の陣容で固められた。これらの人選には、殖産局長心得・糖務局長に就き、台湾総督府の幹部となった新渡戸稲造（2期生）があたったと推察される¹⁹⁾。その後、1911年10月臨時台湾糖務局は廃止となり、糖政事務は新設の民政部殖産局糖務課へ移行したが、後述する糖業試験場²⁰⁾の技師に就いた札幌農学校卒業生が糖務課技師を兼務して、糖政事務に従事し続けた。

他方、民政部殖産局農商課では、台湾総督府の農業施策を台湾全島に徹底する上で、農政実務者が必要となり、札幌農学校の農業経済学専攻卒業生が1906年以降に農商課技師として登用されるようになった。1906～08年にかけて、農商課長²¹⁾に小川運平（16期生、前北海道庁第三部農務課長）が、技師に長崎常（8期生、前島根県技師）、東郷実（22期生、

前彰化庁技師）が相次いで就き、殖産局農商課は札幌農学校卒業生の一大拠点となった。

東郷実を地方庁から引き抜き、農商課技師の陣容をさらに揃えるため、佐藤昌介東北帝国大学農科大学長に卒業生の渡台斡旋を依頼したのは、宮尾舜治殖産局長（1907年3月～1910年9月）であった²²⁾。特に、東郷実は1907年1月、彰化庁下の農業者を悉く彰化農会の会員とさせ、彰化農会の財政安定のために会員費を地租徴収率で決め、彰化庁税務課に委託して会員費の徴収を徹底するという、農会組織の改組を強行した²³⁾。その農政手腕により、農商課技師となった東郷実は、「台湾農会規則」（1908年12月律令第18号）の策定にとりかかった。農会は地方庁長の具申と台湾総督の認可により設置することとなり、地方庁長の監督管理下に置かれ、台湾総督府の農業施策を末端まで徹底させる農業団体組織となった。その後、農会は、台湾総督府の農業施策に沿って、①米種改良、②畜産改良、③特用作物改良（甘蔗・茶・煙草）、④園芸改良、⑤肥料共同購買・施肥、⑥農業共進会（産米品評会・稻立毛競作会等）など、各種事業を展開した²⁴⁾。この農会を監督して農政施策を進めることが、殖産局農商課技師（農務課技師：1912～45年）となった北大農学部卒業生と、1906年以降から地方技師（州や庁の内務部勸業課に勤務）²⁵⁾として渡台が増加した北大農学部卒業生の大きな役割であった。

（2）農事試験場・糖業試験場・種畜場・園芸試験場における農業技術の改良

1901年以降、台北・台中・台南農事試験場（1901年設置、1903年11月農事試験場に統合）、糖業試験場（1906年設置）、種畜場（1905年設置）、園芸試験場（1908年設置）といった、台湾総督府の各種試験場の新設により配置された技師・技手職に、札幌農学校卒業生が相次いで就いた。①農事試験場は藤根吉春（主幹1903年3月～、場長1904年6月～、主事1908年6月～1915年9月）のもとで、植物病理部・畜産部・種芸部・昆虫部・農芸化学部の陣容を揃えた。②甘蔗育種・耕作の改良を担った糖業試験場には、主として、土壌学・肥料学・農産製造学を専門とする農芸化学専攻者と、育種学・作物学を専門とする農学専攻者が、③種畜場には牛飼養学を専門とする畜産学専攻者が、④園芸試験場には果樹・蔬菜園芸学を専門とする農学専攻者が就いた。①～④の各試験場は、札幌農学校の専攻領域（農学甲科〔農学〕・農学乙科〔畜産学〕・植物病理学・農芸化学・農用動物学〔昆虫学〕）を遺憾なく発揮できる場であった（表3）。

その後、1921年8月各種試験場を統合して新設した中央研究所農業部では、農業部長の大島金太郎の下で、全6科（種芸科・農芸化学科・糖業科・植物病理科・応用動物科・畜産科）の科長は、北大農学部卒業生が占めるに至った（表4）。

農業部長の大島金太郎は、母校の教授を務めながら、1909年より台湾総督府囑託（1909年1月～）・技師（1918年10月～1920年5月）として、台湾総督府による土性調査に携わってきた。その傍らで、各種技術調査統一のため中央研究所設置を計画し、その指導監督の任に当たっていた²⁶⁾。大島金太郎が完成させた中央研究所全6科の北大農学部卒業生による分掌体制は、1932年糖業科が糖業試験所として独立して5科となった後も維持された。

1939年には中央研究所が農業試験所と改組されたが、初代所長には渋谷紀三郎（1908年農芸化学科卒）が就任し、5科（育種農芸科・農芸化学科・病理昆虫科・畜産科・園芸科）の初代科長は、いずれも元中央研究所技師の北大農学部卒業生（加茂巖・渋谷紀三郎・素木得一・蒔田徳義・桜井芳次郎）が引き継いだ。1939～1944年にかけて、農業試験所は、中央研究所農業部時代と変わらず、北大農学部卒業生の主要な就職先となった²⁷⁾。

表3 台湾総督府農事試験場・糖業試験場・種畜場・園芸試験場技師（役職）に就いた札幌農学校卒業生一覧（1908年）

場名	役職	技師名	卒業期、卒業年、専攻（卒論材料）
農事試験場	主事	藤根吉春	8期生、1889年卒（牧草）
	植物病理部長	川上瀧彌	18期生、1900年卒、植物病理学（稲の稲熱病）
	畜産部長	小田代慶太郎	18期生、1900年卒、農学乙科（畜牛飼養）
	種芸部長 （兼：教育部長）	井街頭	19期生、1901年卒、農学甲科（石豆栽培）
	昆虫部長	素木得一	23期生、1906年卒、農学甲科（果樹害虫）
	農芸化学部長	鈴木真吉	19期生、1901年卒、農芸化学（土壌のリン酸溶解度）
糖業試験場	場長	吉田碩造	18期生、1900年卒、農芸化学（苹果酒醸造）
種畜場	主任	長嶺林三郎	18期生、1900年卒、農学乙科（肉牛飼養）
園芸試験場	主任	芳賀鋏五郎	20期生、1903年卒、農学甲科（じゃがいも栽培）

備考 (1) 1908年6月農事試験場は7部（上記部のほか庶務部）に分掌された。

(2) 『台湾総督府農事試験場創立十年記念』（1913年）、『旧植民地人事総覧』台湾編2、「札幌農学校本科卒業生一覧・カリキュラム一覧」（『北海道大学大学文書館資料叢書2』2010年）より作成。

表4 台湾総督府中央研究所農業部・支所技師に就いた北大農学部卒業生一覧（1921年）

部署	役職	技師名	卒業期、卒業年、専攻（卒論材料）
農業部	部長 （兼：士林園芸試験支所長）	大島金太郎	11期生、1893年卒（大麻栽培土壌試験）
	科長 （兼：嘉義農事試験支所長）	磯永吉	1911年農学科卒（小麦の冬枯病）
農業部 種芸科	技師 （兼：平鎮茶業試験支所長）	山田秀雄	16期生、1898年卒、農芸化学（淘汰分析）
	技師	鈴木巖	1913年農学科卒
農業部 農芸化学科	科長	渋谷紀三郎	1908年農芸化学科卒（醸造用麦芽）
	技師	菅野修一郎	1912年農芸化学科卒（糖類の定量分析）
農業部 糖業科	科長	石田研	22期生、1905年卒、農芸化学（緑肥）
	技師	金子昌太郎	21期生、1904年卒、農学甲科（農場労働）
		山村悦造	24期生、1907年卒、農芸化学（白柿の成分分析）
農業部 植物病理科	科長 （兼：糖業科技師）	三宅勉	21期生、1904年卒（桑樹枝条枯病）
	技師	竹内叔雄	1915年農学科第三部卒（水稻・陸稻の解剖）
農業部 応用動物科	科長	素木得一	23期生、1906年卒、農学甲科（果樹害虫）
	技師 （兼：糖業科技師）	石田昌人	1897年農芸伝習科卒
農業部 畜産科	科長 （兼：恒春種畜支所長）	柳川秀興	1909年農学科卒（牛乳）
農業部（分課未定）	技師（兼）	東郷実	22期生、1905年卒、農業経済学（農業殖民論）
高雄検糖支所	所長	吉川藤左衛門	24期生、1907年卒、農芸化学（燕麦）

備考 『旧植民地人事総覧』台湾編4、前掲「札幌農学校本科卒業生一覧・カリキュラム一覧」、「卒業論文台帳」（北海道大学附属図書館蔵）より作成。

1-3. 製糖株式会社における甘蔗生産と製糖技術

札幌農学校卒業生にとって、1906年以後台湾に相次いで新式製糖工場を設置した製糖会社は、台湾総督府技師・技手職に次ぐ好条件の就職先となった（表5）。堀宗一（3期生）が1906年鹽水港製糖株式会社に携わったことを嚆矢として²⁸⁾、主に、農芸化学・農業経済学専攻卒業生が1910年以降に、農学専攻卒業生が1914年以降に製糖会社に就職した。就職先の製糖会社の総数は、15社（鹽水港、阿緱、林本源、明治、北港、台南、大日本、南日本、東洋、台湾、帝国、台東、新竹、新高製糖株式会社、日糖興業株式会社）にのぼる。農学専攻卒業生では1916年台湾製糖株式会社への就職を、農芸化学専攻卒業生では1917年明治製糖株式会社と東洋製糖株式会社への就職をステップにして増加していった。1928年には製糖会社へ就職した北大農学部卒業生は31名とピークに達した。1930年代には、台湾総督府技師として甘蔗栽培のプロフェッショナルとなった者が製糖会社に招聘されたり（金子昌太郎、21期生：農学専攻）、技師職から経歴を積んで製糖会社の取締役になる者（黒田秀博〔農学科第一部1914年卒〕：鹽水港製糖株式会社取締役、柳沢秀雄〔農芸化学科1916年卒〕：大日本製糖株式会社常務取締役、山本岩男〔農芸化学科1915年卒〕：大日本製糖株式会社取締役）も現れるようになった。

表5 台湾で製糖会社に就職した北大農学部卒業生一覧（1906～1942、1944年）

専攻／年	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918
1～12期生	1	1	1	1	1			1	1	1	1	1	1
農学								1	2	6	8	6	
農業経済学					2	2	3	3	4	4	3	3	2
農芸化学					1	2	2	3	2	1	2	9	8
畜産学									1	1	1	1	2
工学科				1	1	1							
計	1	1	1	2	5	5	5	7	9	9	13	22	19

専攻／年	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
農学	7	7	6	4	3	5	6	7	11	11	11	11	11
農業経済学	3	2	2	2	2	3	4	4	4	5	3	2	3
農芸化学	12	14	12	11	12	13	14	15	14	15	14	13	12
畜産学	1	1	1	1									
林学							1						
計	23	24	21	18	17	21	25	26	29	31	28	26	26

専攻／年	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	1942	1944
農学	12	12	12	13	13	14	13	13	13	15	12	10
農業経済学	3	3	2	2	2	2		1	1	1	1	1
農芸化学	12	14	13	12	11	12	12	12	11	12	9	8
畜産学		1	1	1	1							
計	27	30	28	28	27	28	25	26	25	28	22	19

備考 『札幌同窓会報告』、北海道帝国大学『卒業生住所録』、同『卒業生名簿』より作成。

北大農学部卒業生にとって、製糖会社は、「原料生産を含んだ甘蔗製糖事業ほど農科特に農芸化学科卒業生向きの職業はあるまい。まず広大な農場あるいは製糖所区域内で甘蔗栽培の指導を初めとして、その生育収穫運搬圧搾清浄結晶の一貫作業で土壌学、肥料学

植物生理から原料代の買収の計算は農業経済と関係があり、工場の製糖技術は農芸化学の独壇上²⁹⁾であったという。製糖会社に就職した農学専攻卒業生の多くは、自社の原料採取区域内の小作農家・自営蔗園の甘蔗栽培に係わる農業技術者（甘蔗品種の選定・作付の指導、施肥・栽培法・病害防除法の指導、甘蔗収穫・工場搬入の監督など）となり、農務部門の技術職であった。一方、農芸化学専攻卒業生の多くは、東洋製糖株式会社に就いた浜口栄次郎（農芸化学科1916年卒）や鹽水港製糖株式会社に就いた武者主計（農芸化学科1920年卒）のように、製糖工場において工務部門の製糖技術職に就いて、耕地白糖に関する製糖技術改良にあたった。

台湾の製糖業界における北大同窓生の層は、台湾総督府殖産局技師として糖政・農政実務に長く従事する北大農学部卒業生が製糖会社と結びつきを強めていき、製糖会社の技師に就いた北大卒業生が漸次増加していくことによって、一層厚くなっていった³⁰⁾。

1-4. 台湾総督府農林専門学校・台北帝国大学理農学部における教育・研究

台湾総督府にとって、林業もまた重要な産業であったが、台湾総督府による林野調査事業が実施されたのは1910～1914年度であった³¹⁾。本島の約7割を占めていた山林地帯は先住民地域でもあり、調査は先住民統治の進捗と表裏一体であったからである。

林業施策が本格化していく1915年以降、台湾総督府民政部殖産局の営林所には、林学専攻の北大農学部卒業生が就職するようになっていた。そのようななか、台湾総督府技師の大島金太郎が創設の任に当たり³²⁾、1919年台湾教育令公布により新設された台湾総督府農林専門学校（1922年台湾総督府高等農林学校→1927年台湾総督府台北高等農林学校）は、林学専攻卒業生にとって、重要な就職先となった。

表6 台湾総督府農林専門学校（高等農林学校1922-26、台北高等農林学校1927-28）の教授に占める北大農学部卒業生（1921～1928年）

年月	卒業生／教授数	卒業生比率(%)	各年新規に教授に就いた卒業生名（卒業年：専攻）
1921年7月	2人／5人	40.00%	野田幸猪(1917：農学科第一部)・村山醸造(1916：林学科選科)
1922年7月	4人／7人	57.14%	佐藤正一(1921：農芸化学科)・一色周知(1918：農学科第三部)
1923年7月	9人／13人	69.23%	木村謙介(1911：農芸化学科)・竹内叔雄(1915：農学科第三部)・鹿討豊雄(1922：農業経済学科)・加納瓦全(1921：林学科)・八谷正義(1915：林学科)
1924年7月	11人／14人	78.57%	金森貞吉(1916：林学科)・小笠原金亮(1917：農芸化学科)・井街頭(1901：農学)
1925年7月	12人／14人	85.71%	馬場為二(1921：農芸化学科)
1926年7月	17人／25人	68.00%	素木得一(1906：農用動物学)・松本巍(1916：農学科第三部)・足立仁(1921：農芸化学科)・山本亮(1915：農芸化学科)・三宅捷(1918：農芸化学科)
1927年7月	18人／32人	56.25%	渋谷紀三郎(1908：農学科)・深谷留三(1914：林学科)
1928年1月	19人／35人	54.29%	奥田戎(1917：農学科第二部)

備考 『旧植民地人事総覧』台湾編4～5、『榕畔会史』（1978年）、『北海道帝国大学一覧』より作成。なお、村山醸造は1924年1月まで、井街頭は1926年7月までの在職。

大島金太郎（1921年5月より台湾総督府技師に専任、1921年5月～1928年3月北海道帝

国大学教授を兼務）は同校の学校長事務取扱・校長³³⁾を兼務したことから、教授の半数以上は北大農学部卒業生が占めるに至った（表6）。林学専攻卒業生が同校の教育研究体制の中心を担った一方で³⁴⁾、1926～28年の教授には、後述する台北帝国大学理農学部教授候補者（高等農林学校教授職で在籍して在外研究中）が多く含まれている。高等農林学校教授採用となった佐藤正一（1921年農芸化学科卒）は「大島金太郎先生のご高配で台北高農教授として赴任することになった」と回想し、農芸化学科の同級生2名（足立仁・馬場為二）も佐藤に続いて高等農林学校教授として渡台した³⁵⁾。

表7 台北帝国大学理農学部（1928-42）・農学部（1943）の農学系講座の担任教授に占める北大農学部卒業生一覧

講座名	担任教授名	卒業年、専攻分野
生物化学講座	三宅捷	1918年卒、農芸化学
農芸化学第一講座	渋谷紀三郎 徳岡松雄（1942-）	1908年卒、農芸化学 1917年卒、農芸化学
農芸化学第二講座	山本亮	1915年卒、農芸化学
農芸化学第三講座	佐藤正一	1921年卒、農芸化学
植物病理学講座	松本巍	1916年卒、植物病理学
応用菌学講座	足立仁	1921年卒、農芸化学
昆虫学・養蚕学講座	素木得一 一色周知（1942-）	1906年卒、昆虫学 1918年卒、昆虫学
農産製造学・製糖化学講座 （製糖化学講座1940-）	浜口栄次郎	1916年卒、農芸化学
醸造学講座	馬場為二	1921年卒、農芸化学
畜産学講座 （畜産学・熱帯畜産学第二講座1943-）	山根甚信	1913年卒、畜産学
畜産学・家畜衛生学講座 （畜産学・熱帯畜産学第一講座1943-）	加藤浩	1923年卒、畜産学
農学・熱帯農学第一講座	奥田戒	1917年卒、農業経済学
農学・熱帯農学第二講座	田中長三郎	1910年卒、東京帝国大学農科大学
農学・熱帯農学第三講座	磯永吉	1911年卒、農学
農学・熱帯農学第四講座	市島吉太郎（-1934没）	1915年卒、農学

備考 『台北帝国大学一覧』、『北海道帝国大学一覧』等より作成。理農学部は1943年理学部・農学部に分離。

1928年3月台北帝国大学理農学部が新設され、北大農学部卒業生に新たな就職先が加わった。台北帝国大学創設準備委員（1925年11月19日～1928年3月17日）には大島金太郎が囑託され³⁶⁾、大島は大学設置準備事務へ中核的に参画した³⁷⁾。台北帝国大学創設準備委員7名の内、農学系の陣容は、大島金太郎のほか、田中長三郎（東京帝国大学農科大学1910年卒、宮崎高等農林学校教授）と、大島の門下生の山本亮（1915年農芸化学科卒、理化学研究所研究員）しかおらず、農学系教官候補者の人選・講座編成は大島金太郎が掌握していたと考えられる。北海道帝国大学農学部からも、大島金太郎教授の下で助教授だった三宅捷をはじめ、山根甚信・足立仁らが台北帝国大学に転出した。その結果、1928～42年にかけて、台北帝国大学理農学部では、農学・熱帯農学第二講座（担任：田中長三郎教授）以外、農学系講座の担任教授はすべて北大農学部卒業生となった（表7）。特に、理

農学部では、①生物化学講座、②農芸化学第一講座（土壌学・肥料学）、③農芸化学第二講座（食品化学・農薬学）、④農芸化学第三講座（栄養化学）、⑤応用菌学講座（土壌微生物学）、⑥農産製造学・製糖化学講座、⑦醸造学講座（糖質原料の醗酵学）といった農芸化学関係の講座が充実し、東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学農学部在学時代に大島金太郎から教えを受けた門下生が、台北帝国大学理農学部の農芸化学関係講座の教授・助教授・助手に就いた。彼らは製糖業界からの委託研究も受けて³⁸⁾、製糖業に直結する農芸化学研究を進めていくこととなった。

一方、大島金太郎は「台北帝国大学理農学部長ハ其ノ道ニ造詣深キ老練ナル人物ヲ以テ之ニ充ツルヲ要スル処目下右ニ該当スヘキ専任者ヲ得ル能ハサルヲ以テ此際多年教育事務ニ経験ヲ有スル同人ヲシテ教授ニ兼任セシメ而シテ同学部長ニ補」(1928年3月6日付起案・決裁、内閣総理大臣宛て台湾総督内申案)すとして³⁹⁾、1928年57歳にして台北帝国大学理農学部の初代学部長に就任し、1939年急逝するまで理農学部の運営を担った。

2. 植物学教室卒業生の渡台とその背景

本章では、1900年代初期から台湾総督府の技師として、1920年代から台北帝国大学理農学部の教官として、渡台者を輩出した植物学教室に焦点をあてる。札幌農学校の植物学教室（後の北海道帝国大学農学部植物学教室）において、卒業生が渡台した最初の事例は、1903年10月川上瀧彌^{かわかみたきや}の渡台である。川上以降、表8に掲げた8名（鈴木力治～佐々木欽也）が植民地台湾に渡った。9名にそくしてやや具体的に、北大農学部卒業生が渡台した経緯と彼らが必要とされた背景をみていくこととする。

表8 渡台した北大農学部植物学教室卒業生一覧（1903～44年）

No	氏名	卒業期・学科（卒業年）	在台年	在台期の職種（台湾総督府における主な勤務先）
1	川上瀧彌	18期(1900年卒)	1903-1914	台湾総督府嘱託→台湾総督府技師 (民政部殖産局農商課、農事試験場植物病理部)
2	鈴木力治	23期(1906年卒)	1906-1909	台湾総督府嘱託→台湾総督府農事試験場技師 (農事試験場植物病理部)
3	三宅勉	21期(1904年卒)	1910-1940	台湾総督府臨時台湾糖務局技師→台湾総督府技師 (糖業試験場、中央研究所農薬部、糖業試験所)
4	竹内叔雄	農学科第三部(1915年卒)	1916-1928	台湾総督府雇→台湾総督府技手→台湾総督府中央研究所技師→台湾総督府高等農林学校教授 (糖業試験場、中央研究所農薬部)
5	辻良介	農学科第三部(1918年卒)	1924-1925	台湾総督府技師(植物検査所基隆分所)
6	後藤一雄	農業生物学科(1922年卒)	1928-	台北帝国大学理農学部助教授→台北帝国大学農学部教授
7	松本巍	農学科第三部(1916年卒)	1928-	台北帝国大学理農学部教授→台北帝国大学農学部教授
8	山本和太郎	農業生物学科全科選科 (1928年修了)	1929-	台北帝国大学理農学部助手→台北帝国大学農学部助教授
9	佐々木欽也	農業生物学科(1930年卒)	1930-1935	台湾総督府中央研究所技手(嘉義農事試験支所)

備考 『台北帝国大学一覧 昭和十八年』、『旧植民地人事総覧』台湾編1～6、『札幌同窓会報告』、『台湾総督府公文類纂』(国史館台湾文庫蔵)より作成。なお、松本は1965年まで国立台湾大学教授として在台したが、戦後、山本は兵庫県立兵庫農科大学教授に、後藤は岐阜県高山高等学校長に転出した。

2-1. 台湾総督府民政部殖産局における有用植物調査—川上瀧彌—

最初に渡台した川上瀧彌は、札幌農学校予科在学中から、既に、日清戦争によって侵攻がすすむ「占領地」の植物に強い関心を抱いていた。川上瀧彌は、従軍中の兄の川上廣衛（第二師団野戦砲兵第二連隊第二大隊）に、「軍備ノ暇占領地ノ植物ヲ採集スルコト」を懇願して1894年には清国盛京省産植物130種を⁴⁰⁾、1895年12月には台湾産熱帯植物215種を採集してもらい、札幌農学校植物学教室へ送付させている⁴¹⁾。植物学教室は、「熱帯地方の珍奇なる」台湾産植物を研究素材とみなし、入手した「鳳梨」（パイナップル）の苗を植物園の温室に移植して、種子類を温室に播種した⁴²⁾。日清戦争は、札幌農学校植物学教室に、台湾という植物学研究の新たなフィールドをもたらしたのである。

本科へ進学した川上瀧彌は、植物病理学専攻生として「稲のいもち病」を研究する一方、夏期休暇を利用して利尻島・奥尻島などの離島調査を実行し、植物標本の採集に邁進した学生であった。さらに、在学中から、北海道庁の嘱託として、①国後・択捉・色丹三島の森林植物調査、②北海道主要材木分布調査に従事して、植物調査の技術を磨いた。植物病理学専攻生として、北海道産農作物の病害に対して「植物病理学」の学識から防除対策を研究すると共に、「植物分類学」の学識から北海道産樹木植物の全容を解明しようと現地踏査・標本採集調査にあたった川上は、まさに、「植物病理学」と「植物分類学」を双輪とした宮部金吾教授の教育・研究方針の申し子であった⁴³⁾。

卒業後、川上は、宮部教授の推薦で1901年6月から熊本農業学校教諭を務めていたが、宮部教授には「台湾行の事」を「兼々御願申上」げていた⁴⁴⁾。川上が渡台に至るまでの経緯や人的つながりは、以下のとおり、恩師宮部金吾に宛てた書簡が明らかにしてくれる。

(1) 1903年1月、川上瀧彌は渡台への意欲を宮部金吾教授に再度熱く訴え、宮部から帰国予定の新渡戸稲造（当時は台湾総督府民政部殖産局長心得）へ、川上の渡台斡旋をするよう懇願した。渡台後の職務には、「新開地などの天産物調査」か「只今の研究調査〔桐樹萎縮病調査—引用者〕の如きもの、様なる仕事」⁴⁵⁾に就きたいと希望した（1903年1月2日付宮部金吾宛書簡）。

(2) 1903年2月26日、宮部教授の斡旋が功を奏し、川上は新渡戸に馬関停車場待合室で面会を果たした。新渡戸からは、①「此度軍艦便乗殖民地調査の人を要し候間小生を候補者と被致」と川上を植民地調査の候補者としたが、②川上の熊本農業学校在職が懸案のため⁴⁶⁾、③「小生ハ例の病理部担任の為に致され度御見込に候ハバ之ハ差当り官制の改正後の事と存候間兎に角執るべき仕事に御採用願候事と致候」と、川上は台湾総督府農事試験場の植物病理部（1908年6月設置）への配属予定として、採用見込みとなった。川上にとって渡台は「川上の運命を試むる好機会」であり、渡台が実現すれば「自然面白き研究材料を見出す」と宮部教授に渡台への抱負を述べた（1903年2月付宮部金吾宛書簡）。

(3) 1903年5月29日、台湾総督府側では川上の赴任が決まっており、6月5日には新渡戸の交渉で熊本県知事の下承を得た（1903年6月5日付宮部金吾宛書簡）。

台湾総督府内では、川上の採用にむけ、柳本通義（当時は、民政部殖産局拓務課長）が殖産局長代理として、正式に、民政長官宛てに1903年9月29日付「囑託員採用ノ義内申」を提出し、台中農事試験場の補助員として、川上を、「札幌農学校ヲ卒業シテ北海道庁ニ職ヲ奉シ以テ熊本農業学校ノ教諭ニ任セラレ学識ト経験ヲ有スルモノニテ農事試験事務ニ従事セシムルニハ最モ適任ノ者ト被認候」と推薦した⁴⁷⁾。川上は1903年10月12日付で「農事ニ関スル事務ヲ囑託」され、台湾総督府囑託として採用された（表9）。川上瀧彌の渡台は、母校側（宮部金吾教授）と、台湾総督府民政部殖産局内の札幌農学校同窓生側（新渡戸稲造、柳本通義）とのすでにできあがっていた強靱な人事斡旋・連携構造のもとで、実現した。

表9 川上瀧彌略年譜 (1871-1915)

年月日	居住地	略歴
1871年1月24日	山形	山形県飽海郡松嶺町生まれ
1896年7月7日	札幌	札幌農学校予科修了
1896年9月		札幌農学校本科進学
1898年7月19日		北海道千嶋国後択捉色丹三島森林植物調査囑託／北海道庁（～1901年6月4日）
1900年7月4日		北海道主要林木ノ識別法・模式図・効用及分布調査囑託／北海道庁（～1901年6月4日）
1900年7月7日	熊本	札幌農学校本科卒業（18期生）
1901年6月25日		熊本県立熊本農業学校教諭（1901年10月15日～1903年9月熊本県熊本農学校教諭）
1902年7月22日		九州地方植物採集囑託／東京帝国大学
1903年10月12日	台湾 (台中)	任台湾総督府囑託（農事に関する事務囑託） 台湾総督府民政部殖産局勤務、 台中農事試験場長心得（～1903年11月24日台中農事試験場廃場のため帰府）
1903年12月1日	台湾 (台北)	台湾総督府農事試験場勤務
1904年1月11日		任台湾総督府技師（高等官七等十級俸） 台湾総督府民政部殖産局農商課勤務
1904年7月30日		〔兼任〕臨時台湾糖務局技師（～1911年10月16日臨時台湾糖務局廃止・廃官）
1904年9月1日		〔兼務〕農事試験場
1908年2月13日		〔兼務〕民政部殖産局林務課
1908年7月10日		〔兼任〕台湾総督府農事試験場技師
1908年7月19日		〔兼務〕殖産局博物館長（～1911年6月21日）
1912年5月29日		〔兼務〕民政部殖産局附属博物館長
1915年8月20日		死去（享年44歳）

備考 台湾総督府作製の川上瀧彌の履歴書（北海道大学大学文書館蔵、佐藤政雄寄贈資料）より作成。

その後、1904年1月11日付で台湾総督府技師に任命された川上は、民政部殖産局農商課において、1905年4月より台湾総督府が開始した有用植物調査事業⁴⁸⁾に従事する。川上は有用植物調査係長として実務担当者となり⁴⁹⁾、先住民地域の高山地帯を含む台湾本島内を踏査した。1904年7月から臨時台湾糖務局技師を兼任し、同年9月から台湾総督府農事試験場を兼務するものの、川上の主たる業務は、台湾総督府の財政に有益となる野生植物の徹底調査にあった。有用植物調査事業の結果、1910年3月には台湾総督府民政部殖産局から『台湾植物目録』を編纂・出版した。『台湾植物目録』は2,368種（顕花植物2,067種、隠花植物301種）を収録しており、川上が台湾島内の植物採集・分類にいかに関与していたかがわかる。また、植物調査は時間と経費が遠大にかかるため、植物調査の必要性を訴えて予算を確保する意図で、川上は、有用植物の一例として「野生護謨樹調査」（1906

年6月）も実行して野生ゴムの「護謨苗圃」設置へとつなげたり、先住民地域の霧社でキニーネを抽出するキナノキの試作（「規那樹栽培試験」1915年）をするなど、植物調査が台湾経営に有効であることを台湾総督府内外で訴え続け、1915年急逝するまで植物調査を続けた。

2-2. 台湾総督府農事試験場における農作物病害調査—鈴木力治—

川上瀧彌の次に植物学教室から渡台したのは、川上と同郷の鈴木力治（23期生）であった。台湾総督府は、1906年10月7日付で、札幌農学校卒業直後の鈴木力治に、「農事試験ニ関スル事務ヲ囑託」し、農事試験場勤務を命じた。

鈴木力治が赴任した台湾総督府農事試験場は、1903年11月台北・台中・台南農事試験場の廃合から3年が経過していたが、未だ耕地整理の途中で試験場整備が整わず、水稻や蔬菜などの農事試験を本格的に実施する段階には至っていなかった⁵⁰⁾。台湾総督府農事試験場では、1908年6月22日台湾総督府農事試験場官制（勅令第159号）の発布まで、本官（専任の技師等）を配置することができず、「囑託」や「雇」の身分で試験場員を集めるほかなかったと、農事試験場の開場以来、実質的な実務責任者であった藤根吉春は回想している⁵¹⁾。そのようななか、鈴木力治が渡台できたのは、「多ク雇員囑託ナリシタメ場員ノ異動頻繁ニシテ事業ノ支障少ナカラサリシ」⁵²⁾と危惧していた農事試験場長の藤根吉春が、「囑託」としてでも、農事試験場の実務を担う人材を、母校に求めたためであったと推察される⁵³⁾。

表10 台湾総督府農事試験場に就職した札幌農学校卒業生（1905～06年）

氏名	卒業期（卒業年）専攻	発令年月日	職種〔辞令内容〕、経過
吉田碩造	18期生(1900年卒)農芸化学	1905年 3月27日	囑託〔農事試験に関する事務囑託〕 →1905年8月9日農事試験場主幹 →1907年2月27日臨時台湾糖務局技師(転出)
小田代慶太郎	18期生(1900年卒)畜産学	1906年 6月22日	囑託〔農事試験に関する事務囑託〕 →1908年7月1日農事試験場技師
井街頭	19期生(1901年卒)農学	1906年 9月1日	囑託〔農事試験に関する事務囑託〕 →1908年7月1日農事試験場技師
鈴木力治	23期生(1906年卒)植物病理学	1906年 10月7日	囑託〔農事試験に関する事務囑託〕 →1908年7月1日農事試験場技師

備考 『旧植民地人事総覧』台湾編1～2、『札幌同窓会報告』、『台湾総督府公文類纂』（国史館台湾文献館蔵）より作成。

農事試験場では、藤根吉春場長のもとで、表10の4名が「農事試験ニ関スル事務ヲ囑託」という名目で、囑託として採用された。農業経済学以外の各専攻から1名ずつの採用であった。植物病理学専攻としては、すでに、前述の川上瀧彌技師が1904年9月1日から農事試験場を兼務していたが、①臨時台湾糖務局技師を兼任して甘蔗病害対策にあたっていたこと、②民政部総務局学務課を兼務し（1905年8月～）、台湾小学校及台湾公学校教員講習会講師も務めていたこと、③民政部殖産局農商課において台湾島内の有用植物調査のために不在が多いことなど、公務多忙で農事試験場の試験農作物に対する病害対策には

専念できなかったものと考えられる。そのため、植物病理学専攻の者で、農事試験場に専属する人材が求められ、「熱心なる南進論者」⁵⁴⁾であった鈴木力治に、白羽の矢がたてられたのだろう⁵⁵⁾。

鈴木力治が農事試験場で最初に行なった業務は、台湾における栽培作物の病害の全容をとらえることであった。農事試験場官制発布から3カ月後の1908年9月、台湾総督府農事試験場は、植物病理部紀要第一号として、川上瀧彌・鈴木力治編『台湾農作物病害目録(其一)』を刊行した⁵⁶⁾。1906年～1908年7月にかけて、植物病理部(部長:川上瀧彌(兼任)、部員:鈴木力治技師・藤黒與三郎技手)が台湾北部・中部地域の農作物病害調査を行ない、病原菌を検定して一覧化したものである。台湾総督府が最重要農作物と位置づけていた水稻の病害が6種、製糖原料である甘蔗の病害が5種と、他の植物(穀類、蔬菜、特用作物、果樹、牧草・緑肥作物、森林)の病害と比して多く記載されている。甘蔗病害以外の病原菌標本のほとんどは、鈴木力治が1907年に採集したものであった。

また、目録の刊行にあたっては、川上瀧彌が宮部教授に甘蔗病害標本を送付して検定を依頼し、鈴木力治が宮部教授に目録原稿の添削を依頼している⁵⁷⁾。台湾総督府農事試験場の植物病理部の業務には、検定に不可欠な腊葉(タイプ標本)と最新の専門書籍とを有する札幌農学校植物学教室と、豊かな学識を有する宮部金吾教授の役割が大きく、台湾と札幌間の連絡を密にとらなければ、その業務は成り立たなかった。

鈴木力治は、農事試験場にあつて農作物病害の標本採集と病原菌の検定を主導していたが、「これまで小生も及ばせながら台湾の北中南部の標本は一通り集め候今年四月台東の採集に行くべかりしをも年来の病にて」(1909年5月20日付宮部金吾・佐藤昌介宛て鈴木力治書簡)、1908年11月入院し、1909年4月24日転地療養のため離台して、同年8月1日より休職した。離台してもなお、鈴木力治は、トイブラー著“Coronial Botany”の翻刻出版を計画したり、熱帯植民地の農業について著述しようとするほど、植民地研究へと傾斜した⁵⁸⁾。しかし、鈴木は台湾に再び戻ることはなく、1915年4月10日死去した。

2-3. 台湾総督府糖業試験場における甘蔗の病理学研究—三宅勉・竹内叔雄—

農事試験場植物病理部では、唯一の専任技師であった鈴木力治が1908年11月入院したため、上司の川上瀧彌は、本務(農務課技師)と他の兼任・兼務とで、その多忙さは深刻な状況に陥った。12月には、川上瀧彌と宮部金吾の間で、鈴木力治技師の代わりとして、東北帝国大学農科大学講師の三宅勉(21期生)が候補者としてあがった⁵⁹⁾。三宅は1904年札幌農学校を卒業後、宮部のもとで、樺太植物調査・植物誌編纂を担当する実力派であった。

しかし、三宅勉の技師採用はスムーズに進まなかった。①台湾総督府官制改正のため技師採用の困難(1908年12月7日付宮部金吾宛て川上瀧彌書簡)、②囑託ならば直ちに採用可能(1909年2月25日付同)、③大学副手の三浦慶太郎(24期生:植物病理学専攻)を囑託に宮部が推薦(1909年4月14日付同)するなど、紆余曲折した。④鈴木休職且つ川上の博物館長兼務により三宅勉を後任として川上が再度希望(1909年7月22日付同)、⑤臨

時台湾糖務局で植物病理学専門の人材を採用することに甘蔗病害が注視されている現今から、大島久満次民政長官と宮尾舜治殖産局長が同意（1910年4月30日付同）、という過程を経て、⑥1910年9月2日付で宮尾舜治（臨時台湾糖務局長代理）が佐久間左馬太総督宛てに「右者当局技師ニ適任ノ者ニ有之且ツ定員補充ノ必要有之候」と三宅勉の採用内申を出して、⑦同年10月1日付で三宅勉の臨時台湾糖務局技師任用に至った⁶⁰⁾。農事試験場植物病理部の技師職への採用はできなかったが、三宅勉を技師（高等官）へ採用させたことは、川上瀧彌の尽力に拠る。

そして、臨時台湾糖務局への植物病理学専門の技師職の配当は、台湾総督府側が認めざるを得ない状況にあったことも大きい。1906年糖業試験場（台南）が開場して間もなく、場内では、台湾総督府が作付面積収量の増進（蔗茎の増収）をはかるために輸入した外国産品種の甘蔗苗から病害が発生し、感染が年々拡大していた。糖業試験場で輸入品種の甘蔗苗を増殖し、製糖会社・自作農家に配布して、糖業施策を進める台湾総督府にとっては、甘蔗病害対策は緊要事項であった。糖業試験場では、1908年ジャワ産甘蔗茎に赤腐病の発症を、1909年オーストラリア産甘蔗葉に露菌病の発症を場内に確認し、露菌病にいたっては1910年試験場各圃場に大蔓延した。在来種（竹蔗、紅蔗等）にその被害はほとんどなく、台湾総督府が行なった外国産品種輸入の際に台湾に持ち込まれたと考えられた⁶¹⁾。さらに、1913年より、糖業試験場において、病害に対する抵抗力の強い品種を育成することを目的として、甘蔗の実生交配育種⁶²⁾を開始すると、「栽培品種の変化すると共に発生する病害の種類も亦変化し来る」と三宅勉が指摘するように、外国産品種と実生育成品種のそれぞれに新たな甘蔗病害が起こった。肥料施用量の増加と肥料種類の多様化も新たな病害を招き、三宅は、病原菌の検定と駆除予防法に常に追われた（表11）⁶³⁾。

表11 甘蔗に関連する三宅勉の主な研究調査報告一覧

著者	研究調査報告書名
三宅勉	「甘蔗露菌病調査報告（台湾甘蔗病害編其一）」 （『台湾総督府民政部殖産局附属糖業試験場特別報告』第1号、1912年3月）
三宅勉	「外国輸入蔗苗に就て」（『台湾農事報』第82号、1913年9月、1～23頁）
三宅勉	「外国輸入蔗苗に就て其二」（『台湾農事報』第116号、1915年7月、38～63頁）
三宅勉、小野佐雄	「蔗糖分減損ニ就テ」 （『台湾総督府民政部殖産局附属糖業試験場特別報告』第2号、1913年12月）
三宅勉、安中栄	『蔗糖分減損ニ関スル調査報告』（台湾総督府殖産局、1914年）
三宅勉、鶴仲壽美、安中栄	「甘蔗赤腐病ニ関スル調査報告」 （『台湾総督府民政部殖産局附属糖業試験場特別報告』第4号、1916年3月）
三宅勉	「甘蔗鳳梨病調査報告」 （『糖業試験場特別報告』第10号、台湾総督府殖産局、1919年3月）
三宅勉、脇克明	「甘蔗葉片部裂傷被害対照試験」 （『台湾総督府中央研究所農薬部彙報』第11号、1923年10月）

備考 植物学教室図書室旧蔵論文別刷コレクション（北海道大学大学文書館蔵）より作成。

その後、1915年8月20日川上瀧彌技師が急逝し、農事試験場の現場を統括していた藤根吉春が1915年9月22日離職して岩手県農学校長に転出すると、川上の後任者を植物病理学

専攻者から、直ちに「技師」として採用することができなかった。三宅勉が人材斡旋を宮部金吾教授に依頼し、総督府内で奔走しても、1916年1月19日付で竹内叔雄^{たけうちよしお}（農学科第三部1915年卒）を、「甘蔗栽培試験技術ニ従事セシムル為」に「雇」で採用するのが精一杯であった⁶⁴⁾。「将来は全氏に専ら甘蔗の生態及生理上に関する事項の調査を依頼すべき心組に候」⁶⁵⁾と三宅勉が期待した竹内叔雄は、1918年1月11日付で鶴仲壽美技手（蔗苗養成・検査担当）の後任として技手職に就き、1919年10月10日付で井街顕技師の後任として台湾総督府農事試験場技師（種芸部・教育部勤務）に採用されるなど、後任ポストとしての採用で常に苦節した。その後、竹内叔雄は、大島金太郎のもとで1921年8月11日中央研究所技師（農業部植物病理科勤務）に、大島金太郎の抜擢により1922年7月26日台湾総督府台北高等農林学校教授に任ぜられたが、病気のため1928年10月15日辞職願を出し、離台した⁶⁶⁾。

また、竹内叔雄に続き、植物学教室から台湾総督府への採用は、農商務省植物検査所嘱託であった辻良介（農学科第三部1918年卒）の採用である。関東大震災により、横浜にあった農商務省植物検査所が焼失し、辻良介は宮部金吾教授に転職先を依頼していた⁶⁷⁾。辻良介は、1924年7月1日殖産局附属植物検査所（基隆分所主任）勤務として、台湾総督府技師に採用された⁶⁸⁾。外国輸入蔗苗を中心とする外国産品種の植物に対する検疫は、植物病害・病虫の侵害を防除する上で必要不可欠な役務であった。植物検査所への就職斡旋は、宮部金吾教授と植物検査所創設構想から農商務省との協議に携わっていた素木得一技師（23期生、植物検査所長初代所長）に依るところが大きい⁶⁹⁾。しかし、辻良介も罹患が理由で1925年5月1日付で免官となり、郷里で11月29日死去した⁷⁰⁾。また、1930年佐々木欽也（農業生物学科1930年卒）が台湾総督府中央研究所技手となり、嘉義農事試験支所（1930年～）、中央研究所（1933年～）に勤務し、専ら植物病害の研究にあたったが、佐々木も1935年3月3日病死した⁷¹⁾。

2-4. 台北帝国大学理農学部における植物ウィルス学・遺伝学研究—松本巍・後藤一雄—

1920～24年にかけて国内では農学系の官立専門学校（鳥取高等農業学校、三重・宇都宮・岐阜・宮崎高等農林学校）の増設が相次ぎ、植物学教室卒業生は、宮部金吾教授の斡旋により、数少ない植物病理学担当の教授職に順次、就いていった⁷²⁾。しかし、北海道帝国大学農学部では、植物学第三講座（1922年～）から植物学系講座の増設が見込めず、教官定員に空きがなかった⁷³⁾。さらに、1924年から北海道帝国大学総長佐藤昌介が理学部増設の意向を示していたが、閣議で理学部増設費が決定したのは、台北帝国大学理農学部設置決定より遅く1926年11月であった⁷⁴⁾。台北帝国大学理農学部の新設は、植物学教室卒業生にとって、新たな研究拠点をもたらした。

まず、1926年3月15日、盛岡高等農林学校教授の松本巍^{まつもとたかし}（農学科第三部1916年卒）が、2年後新設される台北帝国大学理農学部の教授候補者として、台湾総督府高等農林学校教授に転任した。松本は台湾総督府在外研究員として2年間欧米留学を経て、1928年5月30

日付で台北帝国大学理農学部教授（植物病理学講座担任）に就任した⁷⁵⁾。松本教授の下では、山本和太郎（農業生物学科全科選科1928年修了）が助手につき、同大学植物病理学教室の教育・研究を補佐した⁷⁶⁾。また、北海道帝国大学農学部講師の後藤一雄（農業生物学科1922年卒）も、1928年5月11日細胞学と遺伝学の担当として台北帝国大学理農学部の助教授に採用された。

表12 松本巍略年譜（大学卒業から渡台年まで）及び在台期の主な研究論文一覧

年月日	略歴
1916年10月2日	東北帝国大学農科大学農学科第三部卒業
1917年4月	学術研究の目的で、米国へ私費留学
1917年8月	カリフォルニア州立大学大学院入学〔植物病理学・生物学専攻〕
1918年5月15日	カリフォルニア州立大学大学院修了、Master of Science を取得
1918年9月	セントルイス市私立ワシントン大学大学院入学〔ミズーリ植物園のダグガー教授研究室において、生理学的病理学、植物分類学を専攻する〕
1919年10月8日	文部省在外研究員
1920年6月10日	ワシントン大学大学院修了、Ph.D を取得
1920年10月	ロンドン大学生理学教室において菌糸の侵入性に関する研究に従事（～1921年5月帰国）
1921年5月9日	盛岡高等農林学校教授
1924年2月12日	農学博士（北海道帝国大学）
1926年3月15日	台湾総督府高等農林学校教授、台湾総督府在外研究員（ドイツ・イギリス・アメリカに留学）
1927年5月13日	台湾総督府台北高等農林学校教授
1928年4月1日	台北帝国大学附属農林専門部教授
1928年5月30日	台北帝国大学教授（理農学部勤務、植物病理学講座担任） 〔兼任〕台北帝国大学附属農林専門部教授
在台期の主な研究論文	松本巍「煙草ヴィールス性壞疽疾患」第1報～第5報 （『台湾博物学会会報』第22巻第236号～第240号、1943年）
	松本巍「血清反応に依る植物病害の診断に就て」 （『熱帯農学会報』第1巻第1号、1929年7月、14～22頁）
	松本巍・山本和太郎、Three Important Leaf Spot Diseases of Sugar Cane in Taiwan (Formosa). （『台湾における甘蔗三大葉病害』『熱帯農学会報』第6巻第27号、584～598頁、1934年）
	松本巍・山本和太郎「二三の甘蔗病原菌の完全及び不完全時代に就て」 （『病虫害雑誌』第23巻第1号～第2号、1936年）

備考 「台湾総督府公文類纂」No. 10051（国史館台湾文献館蔵）、前掲植物学教室図書室旧蔵論文別刷コレクションより作成。[] は山本による和訳。

宮部金吾教授は、植物寄生生物学の専門家として、菌学（菌類病）を主体として研究し、門下生を指導してきた。そのため、台湾総督府技師となった宮部金吾教授の門下生（川上瀧彌～辻良介）は、台湾産農作物の病害に対して、菌学（菌類病）からの調査研究が基軸であった。その一方で、松本巍や後藤一雄は、大学卒業後、米国セントルイスのワシントン大学附属ミズーリ植物園 (Missouri Botanical Garden) でダグガー教授 (Benjamin Minge Duggar, 1872-1956) につき、松本巍は植物病理学におけるウィルス学について、後藤一

雄は植物生理学における細胞遺伝学について、研鑽を積んでいた。この2名には、台湾総督府が有用農作物とする甘蔗、イネ、煙草等の病害に対して、植物学分野の新領域で、最先端であったウイルス学・細胞遺伝学からのアプローチが可能であった。台北帝国大学創設準備委員会委員の大島金太郎は、最新の植物病理学・植物生理学を知る松本・後藤を、台北帝国大学へ招聘して渡台させたのである。その結果、台北帝国大学において、松本巍は植物病理学教室においてウイルス感染による植物病害（甘蔗や煙草のモザイク病、イネの萎縮病など）を、後藤一雄はイネ科植物等の染色体数の研究をさらに進めていった（表12、13）。

表13 後藤一雄略年譜（大学卒業から渡台年まで）及び在台期の主な研究論文一覧

年月日	略歴
1922年3月31日	北海道帝国大学農学部農業生物学科卒業
1922年5月	北海道帝国大学大学院入学〔植物生理学専攻〕（～1926年8月30日）
1924年	植物の染色体数に関する研究論文を発表。 Über die Chromosomenzahl von <i>Secale, cereale</i> L. （[ライムギの染色体数について]『植物学雑誌』第38巻第453号、1924年、135～151頁）
1926年9月3日	北海道帝国大学農学部講師（～1928年7月5日）
1926年9月20日	米国 The International Education Board の研究員に選拔され、ミズーリ植物園のダッガー教授研究室において植物生理学を専攻（～1927年12月）
1928年5月11日	台北帝国大学助教授（理農学部勤務、担当：細胞学・遺伝学）
在台期の主な研究論文	後藤一雄、Physiological Researches on Pollen, With Special Reference to the Artificial Germination of Gramineae Pollen. （[花粉の生理学的研究—イネ科花粉の人工進化を中心に]『台北帝国大学理農学部紀要』第3巻第2号、1931年3月）
	後藤一雄、Karyologische Studien an <i>Paris</i> und <i>Trillium</i> . （[ツクバネソウ属とエンレイソウ属植物の核学的研究]『遺伝学雑誌』第8巻第4号、1933年8月、197～203頁）
	後藤一雄、A Preliminary Note on Cytological Studies of <i>Oryza</i> . （[稲の細胞学的研究における予備的ノート]『熱帯農学会誌』第5巻第3号、1933年10月、363～364頁）※Eiji Okura との共著。

備考 前掲「台湾総督府公文類纂」No. 10051、前掲植物学教室図書室旧蔵論文別刷コレクションより作成。[] は山本による和訳。

一方、台北帝国大学理農学部の「植物分類学」を主とする植物学第一講座担任教授には、北大卒業生ではないが、東北帝国大学農科大学助教授の工藤祐舜（東京帝国大学理科大学植物学科1912年卒）が就任した。「台湾の大島様〔大島金太郎—引用者〕より親切な御手紙参り、小生を正教授にとの事でありました。（略）台湾で小生が受けなければ分類学以外の講座になり、日本には只一つ〔東京帝国大学のみ—引用者〕しかない様にはなりはすまいかと恐れたり。分類学の為めに小生だけは悦んで引き受くる事に答へ申しました。只、宮部、早田〔早田文蔵：東京帝国大学理学部教授—引用者〕両教授の御賛成する限りと申上しました」（1926年1月21日付宮部金吾宛て工藤祐舜書簡）と、工藤も同じく大島金太郎から招聘を受けた。

工藤祐舜は、1926年2月20日台湾総督府高等農林学校教授に転任し、台湾総督府在外研究員として欧米留学を経て、1928年3月17日台北帝国大学理農学部教授（植物学講座担任）に就任し、台北帝国大学初代植物園長を務めた⁷⁷⁾。工藤祐舜は秋田県横手中学校生徒の頃から宮部金吾に師事しており、進学先も宮部の推薦で決め、大学卒業後は宮部の蒐集した植物標本の整理・論文編纂⁷⁸⁾の専属要員として札幌に招かれていた。工藤の台湾への招聘について、宮部金吾は「北海道帝国大学理学部設立の議は、通過せざりしも、幸ひ台北帝国大学理農学部新設されむとし、植物分類学講座担当者を物色中、其の白羽の矢は君にたち、止むなく君を台湾のために割愛せざるべからざるに到れり。留学出発に先だち、創立委員大島金太郎博士と面談、諸事打ち合せを済し得たるは幸なりき」と、苦渋の決断であったことを回想している⁷⁹⁾。宮部金吾教授にとっては辛い決断であったかもしれない。しかし、1910年代を宮部門下生として札幌で過ごした松本巍と工藤祐舜が、1928年台北帝国大学理農学部の植物学系の二大講座を共に担ったことは、農学系「植物病理学」と理学系「植物分類学」を両輪とした植物学教室の宮部金吾教授の研究教育の「産物」であった。

むすび

第一章の分析から、渡台した北大農学部卒業生の動静を、次のように概括することは許されるだろう。

領台初期の段階では、特に、台湾総督府の殖民地選定・製糖業・先住民政策・製糖業に直接関与する人材が重要視された。殖民地選定・樟腦専売政策にかかわった柳本通義、撫墾署に配された小野三郎・梶山清利、糖業政策の新渡戸稲造らである。わけでも台湾総督府の幹部（事務官や殖産局長心得）となった柳本通義・新渡戸稲造は、渡台した卒業生の中では稀なケースであった。渡台者の多くは、台湾総督府が農業・糖業の政策の実施にあたり、必要となった技術者と行政担当者であった。そして、製糖業の拡張化により新設が相次いだ製糖会社も技術者を必要としたため、北大農学部卒業生の渡台増加につながった。その結果、1900年代～1940年代にかけて台湾総督府の農政担当者（農業経済学専攻者）、台湾総督府の各種試験場・中央研究所農業部・農業試験所の技師（農学・畜産学・農芸化学・植物病理学・昆虫学専攻者）、製糖会社の技師（農学・農芸化学専攻者）、1920年代～1940年代にかけて台北帝国大学理農学部（のちに農学部）の教官（農学・畜産学・農芸化学・植物病理学・農業経済学・昆虫学専攻者）となった北大卒業生たちが、植民地経営を支える役割を担っていった。

第二章の事例分析から、植物学教室卒業生が渡台した経緯と彼らが必要とされた背景は次のように概括しておこう。

いずれの渡台者も、在台の同窓生と母校の教官との人的つながりにより、台湾総督府の技師、あるいは台北帝国大学理農学部の教官として、台湾総督府が重要産業と位置づけた、農業・製糖業の技術的、学術的な担い手となった。とりわけ、製糖業における甘蔗生産は、

植物学教室卒業生が専門とする植物病理学の技術・学術を要請した。台湾総督府も製糖会社も、作付面積収量の増進（蔗茎の増収）と品質改良を図るために、台湾の風土にあった在来品種の作付を推奨せず、①外国品種の輸入と作付、②実生品種の育成と作付、③肥料多量化と多様化を推進した。その結果、栽培品種と肥料の変化によって新たな甘蔗病害が発生し、植物病理学の技術と学術が絶えず必要となる状況に陥った。そのため、植物学教室卒業生は、台湾総督府においては菌学（菌類病）からのアプローチで、台北帝国大学理農学部においては植物ウイルス学からのアプローチで、甘蔗病害の調査研究に従事し、甘蔗栽培に「貢献」したのであった。

農学部他学科、たとえば、製糖業・甘蔗栽培と最も密接に関与したのは、渡台者を最も多く輩出した農芸化学教室であった。母校で農芸化学教室の教授を務めながら、1909年より台湾総督府嘱託・技師を兼ねた大島金太郎は、特に、「土壌」を征することが農業政策の要であるとして⁸⁰⁾、台湾全島を跋渉し、専門の農芸化学（土壌学・肥科学）の見地から、土地肥瘠を判定し、施肥合理化と瘠地改良の基本・指針を示した⁸¹⁾。さらに、大島金太郎が創設の任にあたった台北帝国大学理農学部は、農芸化学系講座が7講座と非常に充実した編成となり、大島金太郎教授の門下生たちが各講座の教官に就き、製糖業・甘蔗栽培に直結する農芸化学研究を進めた。植民地台湾と札幌農学校～北海道帝国大学農学部とのつながりを再考察する上で、製糖業とのかかわりは太い軸であり、渡台した農芸化学教室卒業生の動静を考察しなければならない。

また、北海道帝国大学農学部昆虫学教室の松村松年教授（札幌農学校13期生、助教授1896～1902年、教授1902～1934年）にかかわっては、ただちに次のような指摘を見出せる。

一九〇六、一九〇七の両年、松村は三度にわたって台湾に出張し昆虫を調査したが、同時に甘蔗の害虫調査を五年にわたって台湾糖務局より嘱託された。これは当時東大在任のまま台湾総督府嘱託を兼ねていた新渡戸稲造の進言によるものであった。この台湾行きは彼に昆虫採集上の大収穫をもたらし、特に蝶の新種や未記録種の多数を発見し、欧文和文併せて数編の報文を発表している。また台湾の甘蔗の害虫および益虫について報告し、一九一〇年『台湾甘蔗害虫篇（附益虫篇）』という単行本も発行した⁸²⁾。

「昆虫採集上の大収穫をもたらし、特に蝶の新種や未記録種の多数を発見し、欧文和文併せて数編の報文を発表」したとあるように、新しい領土は新しい研究領域を「濡れ手で粟」で獲得したことを意味した。このことは、北海道大学における学術史を照射する必要性を示唆してもいるのである。

いずれにしても、農学部の植物学教室以外の他学科・医学部・工学部・理学部卒業生と植民地とのかかわりについては、資料収集・整理とあわせて他日を期したい。

〔注〕

- 1) 筆者は、藤原辰史「蓬莱米と磯永吉」（日本台湾学会第12回学術大会Ⅲ、分科会「札幌農学校・北海道帝国大学と植民地台湾」における口頭発表、2010年5月29日。ただし未定稿である。）において、革新的な農業技術であると評されている、台湾総督府技師の磯永吉による「蓬莱米」の品種育成技術を批判的にとらえる報告を聴く機会を得た。
- 2) 1943年、1945年については、現時点で、『札幌同窓会報告』、『札幌同窓会会員名簿』、北海道帝国大学『卒業生住所録』、同『卒業生名簿』の刊行が確認できず、典拠となし得る資料が見当たらないため、今後の課題とする。
- 3) 北海道大学大学文書館蔵。以下、宮部金吾旧蔵書簡について所蔵は略す。
- 4) 1922年台湾総督府高等農林学校→1927年台湾総督府台北高等農林学校→1928年台北帝国大学附属農林専門部→1943年台湾総督府台中高等農林学校→1944年台湾総督府台中農林専門学校。
- 5) 札幌農学校で専攻制が採用されるのは13期生以降。8～12期生の各学生が何を専門としていたのかは8期生から卒業論文より推定ができる。
- 6) 1895年、中学校教諭職に不満を抱いていた藤根は「僕は君〔横山壮次郎―引用者〕の推薦大に力ありて全年十二月君を追て台湾に來り総督府内に机を並へ同室に起臥して一つ鍋の飯を食ふこととなつた」という（藤根吉春「亡友横山壮次郎君を追憶す」、新渡戸稲造編『横山壮次郎君』1910年、65頁）。橋口兼清編『橋口文蔵事蹟録』（1906年、182頁）掲載の1896年1月備急隊（民政局員が短銃携刀した自警団）の写真には、橋口文蔵と共に、横山壮次郎と藤根吉春の姿が見られる。
- 7) 『学芸会雑誌』第20号、札幌農学校学芸会、1896年11月、74頁。
- 8) 『学芸会雑誌』第18号、札幌農学校学芸会、1895年12月、70頁。
- 9) 『学芸会雑誌』第19号、札幌農学校学芸会、1896年6月、70頁。
- 10) 柳本通義について、1896年3月16日付台湾総督府民政局長に採用上申書を提出したのは民政局殖産部長心得橋口文蔵、4月11日「最モ適任」と民政局へ回答したのは北海道庁財務部長酒匂常明であった（「明治二十九年 台湾総督府公文類纂 第二門 進退 追加一」No.119、国史館台湾文献館蔵。以下、「台湾総督府公文類纂」の所蔵は略す）。橋口は元札幌農学校校長（1888～91）、酒匂は札幌同窓会農園事業等にも関与し、いずれも札幌農学校と縁が深い。
- 11) 台湾総督府の先住民対策については、もっぱら北村嘉恵『日本植民地下の台湾先住民教育史』（北海道大学出版会、2008年）に拠っている。撫墾署設置箇所は同書43頁、札幌農学校卒業生の配置については同書44頁、ならびに『旧植民地人事総覧』台湾編1（日本図書センター、1997年）を参照した。
- 12) 「領台初めは官吏も台湾の事情が薩張りわからないので、漠然と不毛地が多いに相違ないから内地人を移すことの極めて必要であると考へないものは無かった。何でも明治三十年に、五百戸を容れやうと云ふ計画を立て、其の補助費を請求した所、議会を通過しそうとの電報が在京木村〔匡一引用者〕秘書官から到達した。サー大變、実はまだ移民地が確定して居らぬので、故横山〔壮次郎―引用者〕技師は南部、僕は苗栗以北と手を分けて調査をした」と藤根は回想している（『台湾農事報』1915年3月、11頁）。
- 13) 1897年5月1日付「宜蘭庁管下植民地調査復命書」（「明治三十年 台湾総督府公文類纂 第十二門 農業 山林原野 十五」No.4532）、同年10月1日付「苗栗管内植民地調査復命書」（「明治三十年 台湾総督府公文類纂 第二門 官規官職 出張」No.4519）。藤根吉春の復命書は、札幌農学校卒業生らしい農業殖民事業の視点であった。そのため、上司の押川則吉殖産部長からは「君等は北海道の積りで土地を視るからだ」と一喝された」という。結局、移民500戸の入植は「調査不十分と云ふ廉で補助否決されたから事なきを得た。其後近年迄移民補助費は提出されなかつた」という（前掲『台湾農事報』11頁）。その後、台湾総督府の官営移民事業は、甘蔗生産のために1909～1918年度（北東平野部における吉野村・旭村・豊田村・林田村移民村の設営）に行われた。

- 14) 柳本通義も、拓殖課長として1897年1月撫墾署を巡回して現地視察をした際、台湾先住民族からの抵抗が激しかった模様を回想している（柳本茂・大井謙一・小林直三郎編『故柳本通義自叙伝』1937年、31～32頁）。
- 15) 小川運平「農政の沿革」（『台湾農事報』第100号記念号、1915年3月、12～15頁）。
- 16) 「功績調書 台湾総督府技師兼事務官 柳本通義」（「明治三十三年 台湾総督府公文類纂 第二門 位記勲章 三十六 追加」No.560）を参照。
- 17) 『札幌同窓会第七回報告』（1899年2月、22頁）、『札幌同窓会第八回報告』（1899年7月、21頁）を参照。1898年6月、横山莊次郎は台北県技師へ、藤根吉春は台南県技師に転出し、小野三郎や梶山清利は、1898年6月撫墾署官制廃止により、それぞれ秋田県第一中学校教諭、石川県林務官（石川大林区署長）へと転じた。
- 18) 産業調査復命書・殖民調査復命書の一部は、『台湾総督府民政部殖産報文』第1巻（1898年）、同第2巻（1899年）に収載。萱場による復命書は、『日本領有初期の台湾—台湾総督府文書が語る原像』（台湾史料叢書1、中京大学社会科学研究所、2005年、113～247頁）に翻刻されている。
- 19) 横山壯次郎の殖産局農商課長への推薦については、新渡戸稲造自身の回想がある（前掲『横山壯次郎君』40頁）。
- 20) 1906年台南支局所属→1907年臨時台湾糖務局所属→1911年殖産局所属。
- 21) 農商課長心得（1908年7月～）→農商課長（1911年4月～1916年8月）。
- 22) 黒谷了太郎編『宮尾舜治伝』（故宮尾舜治氏伝記編纂委員会、1939年、237～241頁）には、殖産局長に就いた宮尾舜治が、殖産局農商課の陣容に、小川運平、東郷実、芳賀敏五郎、山田秀雄、素木得一、長嶺林三郎ら札幌農学校卒業生を抜擢したこと、抜擢した理由は「其れまで台湾に来てみた農業技師は多く札幌出身であつたので人情の機微に明敏なる故人としては新に採用する者でも同じ畑から搜した方が」（237頁）よいと考えたことを挙げている。そして、1907年夏、宮尾舜治が北海道視察をした「重なる要件は人物採集であつた」（237頁）という。実際に、宮尾舜治は、1907年9月30日東北帝国大学農科大学を訪問して佐藤昌介学長と面談し、佐藤学長は9月30日夜と10月2日午後の二度にわたり、山形屋に投宿中の宮尾舜治を訪問している（佐藤昌介「日記 明治四拾年一月（1907） 於札幌」、北海道大学大学文書館蔵）。素木得一も、1907年来学した宮尾に面談し、渡台斡旋を受けたことを回想しており、宮尾が札幌農学校卒業生の技師登用に積極的であったことを裏付けている（素木得一『思い出すまに』素木得一先生米寿記念祝賀事業会、1969年、14～15頁）。
- 23) 前掲『宮尾舜治伝』241～242頁。
- 24) 『台湾農会要覧』（台湾総督府民政部殖産局、1918年）を参照。
- 25) 1920年7月地方官官制改正後は、5州・2庁に配置された技師。
- 26) 1934年2月5日付「故台湾総督府中央研究所技師大島金太郎勲章加授ノ件」（「昭和九年叙勲 内国人一 巻一」、国立公文書館蔵）。
- 27) 前掲『旧植民地人事総覧』台湾編6を参照。
- 28) 『札幌農学校同窓会第十六回報告』1906年9月、44頁。堀宗一は、1901年倒産した札幌製糖株式会社の経営者であった。原料こそ、甜菜から甘蔗への転換ではあったが、製糖会社の経営経験を請われ、台湾総督府臨時台湾糖務局の台南支局長に就き、鹽水港製糖株式会社では取締役兼技師長を務め、経営指導に当たった。
- 29) 宮島博「台湾糖業の先輩たち」（高尾彰一旧蔵雑誌切抜帳、北海道大学大学文書館蔵。収載元の雑誌は不明）。宮島は1924年農芸化学科卒業後、東洋製糖株式会社に就職している。
- 30) 例えば、台湾総督府殖産局特産課技師の色部米作（23期生）と母校の高岡熊雄教授の間では、製糖株式会社への就職斡旋・推薦について、書簡が往復されている（1925年1月26付高岡熊雄宛て色部米作書簡、北海道大学大学文書館蔵）。

- 31) 『台湾の林業 昭和十年度』台湾山林会、1935年、56～57頁。
- 32) 前掲「昭和九年叙勲 内国人一 巻一」。
- 33) 高等農林学校長事務取扱（1922年4月1日付）→高等農林学校長（1923年2月28日付）→台北高等農林学校長（1927年5月13日付）。
- 34) 1928年3月台北帝国大学附属農林専門部に改組された後も、教育研究体制の中心を担ったのは、教授として赴任していた林学専攻の北大農学部卒業生であった（『シルビア』第1～6号〔台北帝国大学附属農林専門部シルビア会、1930～35年〕、『榕畔会史—台湾における高等農林教育のあゆみ』〔榕畔会校史編集委員会、1978年〕、『台北帝国大学一覽』を参照）。
- 35) 佐藤正一「思い出」（『札幌同窓会誌』第3号、1968年、41頁）。一方、鹿討豊雄（1922年農業経済学科卒）は「卒業前の十二月になった頃（略）伯父に当る佐藤総長からよびだされ、（略）たまたま台湾に高等農林が出来る、将来大学に昇格するかもしれないという話がまわってきた。それは君にうってつけじゃないか」と佐藤昌介総長に勧められて赴任している（鹿討豊雄「ビリの特待生と台湾落ち」『札幌同窓会誌』第5号、1969年、19頁）。また、1920年台湾大学期成同盟会が大学設置運動を展開すると、佐藤昌介門下の東郷実「植民地開発上必要なる機関の一は学校である故に植民地に大学を設立せし例は甚だ多く、加奈陀、濠州等何れも大学を有し、吾が北海道に亦農科大学の設立あり」（久保島天麗編『台湾大学設立論』台湾大学期成同盟会、1920年9月、14頁）と母校に言及して、大学設置運動に参画していた。
- 36) 「大正七年 台湾総督府公文類纂 高□進退 第六巻」No.2879、「昭和三年一、二、三月 判任官進退原議 官房秘書課 五」No.10217。以下、簿書損傷のため解読不能文字・欠字は□とする。
- 37) 松本巍撰『台北帝大沿革史』1960年（台文翻訳版、国立台湾大学図書館蔵）を参照。和文原書の所在は不明。
- 38) 『台北帝国大学理農学部創立六十年記念』1988年、馬場為二『ブタノール・イソプロパノール醗酵工業（糖質原料による）研究と実際』1958年等を参照。
- 39) 「昭和三年一、二、三月 高等官進退原議 官房秘書□ 一六」No.10050。
- 40) 宮部金吾「川上廣衛採集盛京省占領地植物」（『植物学雑誌』第9巻第103号、1895年9月、343～346頁）。
- 41) 川上瀧彌のもとに翌年4月に届いた台湾産植物を、『学芸会雑誌』第20号（札幌農学校学芸会、1896年6月、75～76頁）は「台湾島の植物」と題して速報した。
- 42) 前掲『学芸会雑誌』第20号、75～76頁。1904年本科3年級の川嶋一郎が「パインアップル実れり、初めて見る」（1904年1月17日の条）と日記に記したように、植物園温室に移植したパイナップル苗の育成は成功したものと思われる（『北海道大学大学文書館資料叢書3』2009年、55頁）。
- 43) 札幌農学校では、1889年9月米国留学から帰国した宮部金吾を教授に昇任させ、1891年本科課程カリキュラムを改編して「植物学」教育を一新した。それまで1科目であった「植物学」（1886年：11時間、1889年：14時間—週当たり時間数の総数）を、「植物組織学」・「隠花植物学」・「植物生理学」・「植物病理学」に細分化し、本科1～2年級の最比重課目（1891年：21時間）とした。理学系植物学教育の基礎である前者2科目、農学系植物学教育の基礎である後者2科目を備えたカリキュラムは、“農学校”である札幌農学校が農作物の病害対策だけを目指すのではなく、「植物分類学」の研究も重視したことを示す。
- 44) 1903年1月2日付宮部金吾宛て川上瀧彌書簡。
- 45) 川上は、熊本赴任中、桐樹萎縮病、七島蘭鼈甲病を調査し、往復書簡により恩師宮部金吾の協力・教示を受けながら、その病原菌を追究していた。1902年6月には遂に前者の病原菌（命名：グレオスポリウム・カワカミイ）を、12月には後者の病原菌（命名：カワカミヤ・シペリ）を発見した（川上瀧彌「七島蘭鼈甲病論」『毎日新聞』1903年10月2日～4回連載）。

- 46) 一年志願兵で無職の鈴木真吉 (19期生: 農芸化学専攻) が、川上に代わり、採用候補者となった。
- 47) 「明治三十六年 台湾総督府公文類纂 第二門 進退 十八 追加」No.0922。
- 48) 殖産局農務課が掌理していた植物調査は、1920年10月より中央研究所林業部に移管された。
- 49) 台湾総督府作製の川上瀧彌の履歴書中には、「有用植物調査係長」の職名はないが、国立台湾博物館『百年の物語 台湾博物館一世紀典藏品特別号』(2009年、43頁)の川上瀧彌の紹介文には同職名の記載がある。川上引率の植物調査に同行した森丑之助「台北博物館の思い出」(1925年。呉永華『被遺忘の日籍台湾植物学者』晨星出版社、1997年、156～157頁に収載)や、佐々木舜一の回想 (前掲書111頁)でも、川上有有用植物調査の実質的な責任者であったことがうかがえる。
- 50) 『台湾総督府農事試験場創立十年記念』台湾農友会、1913年、7～9、11頁。
- 51) 藤根吉春「追想録」(前掲『台湾総督府農事試験場創立十年記念』7～10頁)。
- 52) 前掲『台湾総督府農事試験場創立十年記念』9頁。
- 53) 1911年6月、山田玄太郎 (16期生、盛岡高等農林学校教授)のもとに、同窓生で盛岡出身の藤根吉春 (当時は台湾総督府農事試験場主事) が訪れた。藤根は、川上瀧彌技師だけでは農事試験場仕事も人手不足なため、山田に渡台するよう勧誘したが、山田は誘いを断り、恩師の宮部金吾に適任者の推薦を依頼している (1911年6月2日付宮部金吾宛て山田玄太郎書簡)。農事試験場の実務に当たる技術者の収集に、藤根吉春が母校の人脈を頼りに奔走していたことは明らかである。
- 54) 東郷実「本書の出版に就て」1頁 (鈴木力治『熱帯と其の農業』1918年、晃文館)。東郷は鈴木1年先輩にあたり、日露戦争前後期、札幌農学校・寄宿舎において学生生活をともにした仲であった。
- 55) 川上の後輩には、鈴木他に、半澤洵 (19期生、札幌農学校助教授)、三宅勉 (21期生、樺太民政署事務嘱託)、河内完治 (22期生、東京帝国大学農科大学) がいたが、いずれも国内で在職・在学中であった。
- 56) 南部・東部地域は調査進行中のため順次報告と「緒言」に記されているが、(其二)の刊行は確認できなかった。
- 57) 1906年3月15日付宮部金吾宛て川上瀧彌書簡、1908年4月17日付宮部金吾宛て鈴木力治書簡。
- 58) 前掲、東郷実「本書の出版に就て」1～2頁。鈴木力治の遺稿は、東郷実・芳賀鉄五郎・川上瀧彌・色部米作ら、台湾総督府に勤めていた札幌農学校同窓生により『熱帯と其の農業』として刊行された。
- 59) 1908年12月7日付宮部金吾宛て川上瀧彌書簡。
- 60) 「明治四三年 台湾総督府公文類纂 第一門 進退原議 第十卷」No.1716。
- 61) 三宅勉が本格的な調査をするまで、いずれも、病原菌の検定はできておらず、防除対策が立っていなかった (1911年3月30日、同年10月12日付宮部金吾宛て三宅勉書簡)。
- 62) 苗の植え付けによる増殖育成ではなく、花粉交配により出来た種子を播いて育成すること。
- 63) 三宅勉「蔗作と病害」(『台湾糖業界空前の事業 全島甘蔗増収品評会並ニ糖業講演会記録』台湾新聞社、1925年、149～155頁)。黄條病、赤腐病、根腐病、萎黄病、白條病など、甘蔗の病害は、甘蔗の品種・肥料の差異により、発生・症状が異なった。
- 64) 1916年1月31日付宮部金吾宛て三宅勉書簡。1916年1月18日付総督宛て高田元治殖産局長「(竹内叔雄採用に関する)内申」(「大正五年 台湾総督府公文類纂 第□門 進退 一卷」No.2577)。
- 65) 同上書簡。
- 66) 「台湾総督府公文類纂」No.3449 (表紙欠損)。簿書内容は「高等官進退原議」。
- 67) 1923年9月23日付宮部金吾宛て辻良介書簡。
- 68) 「台湾総督府公文類纂」No.3853、No.3856、No.4002 (表紙欠損)。簿書内容は「高等官進退原議」。
- 69) 前掲『思い出すまに』37～38頁。
- 70) 栃内吉彦「故辻良介君小伝」(『札幌同窓会第四十七回報告』1925年12月、38～40頁)、桑名伊之吉による序文1頁 (辻良介『苗木ニヨリ伝播スル病害』植物検査彙報第1号、横浜税関植物検査課、1926

- 年)。
- 71) 「故佐々木欽也君小伝」(『札幌同窓会第五十七回報告』1930年12月、9頁)。
- 72) 各校の教授職には、(1)盛岡高等農林学校に山田玄太郎(1898年卒)・富樫浩吾(1922年卒)・松本巍、(2)鳥取高等農業学校に山田玄太郎(校長：1921-36年)・福士貞吉(1919年卒)・平塚直秀(1926年卒)、(3)岐阜高等農林学校に樋浦誠(1922年卒)が就任している。
- 73) 1926年時点では、植物学第一講座は宮部金吾教授(植物寄生病学)、植物学第二講座は坂村徹教授(植物生理学・細胞遺伝学)、植物学第三講座は伊藤誠哉教授(植物生理学・菌学)が担任であった(『北海道帝国大学一覽』皇大正十四年
至大正十五年を参照)。坂村・伊藤はいずれも宮部金吾教授の愛弟子。
- 74) 前掲『北大百年史 通説』年表38～40頁。
- 75) 「昭和三年 4-6月 高等官進退原議 官房秘書課」No.10051。
- 76) 山本和太郎は、松本巍教授のもとで甘蔗等の煤病菌の研究を進めると共に、鉄道枕木の腐蝕対策のため、台湾産木材の腐朽の病原体の検定調査などもした。
- 77) 「昭和四年十、十一、十二月 高等官進退□□ 官房秘書□□」No.10058。簿書内容は「高等官進退原議」。
- 78) Material for a Flora of Hokkaido. (宮部金吾と共著、1913～1924年)、『北海道主要樹木図譜』(1920～1931年)など。
- 79) 宮部金吾「故工藤祐舜氏の伝」(『札幌博物学会会報』第12巻第2・3号、1932年7月、184頁)。
- 80) 大島金太郎「農産改良増殖の根本義」(『台湾農事報』第146号、1919年1月、1～2頁)。
- 81) 前掲1934年2月5日付「故台湾総督府中央研究所技師大島金太郎勲章加授ノ件」。
- 82) 朝比奈英三「北大農学部の動物学と北海道」(前掲『北大百年史 通説』874～875頁)。

〔付記〕

本稿の資料調査にあたり、川上瀧彌旧蔵資料を提供くださった佐藤政雄氏、台湾からサポートしていただいた小坂史子氏・蘇意婷氏・深山厚子氏、調査先の情報をご教示くださった北村嘉恵氏、国史館台湾文献館・国立台湾大学の調査に同行された洪翼廣氏・池上重康氏・井上高聡氏、資料整理をアシストしてくれた大学文書館の技術補助員の皆様に厚く御礼を申し上げます。なお、逸見勝亮大学文書館長との討論によって得られた示唆が本稿に視点の補強をもたらしたことを記して、謝辞に代えたい。

(やまもと みほこ／北海道大学大学文書館員)